

平成26年の新しい年を迎えて

長崎県技術士会会長 山口 和登

新年あけましておめでとうございます。旧年中は会員の皆様に多大なるご協力、ご支援をいただきありがとうございました。本年もよろしくお願いします。

昨年の年頭の辞を読み返してみると、安倍政権発足直後であったためか、安倍内閣の経済再生政策のための金融政策、財政政策、成長戦略の3本の柱にならって、長崎県技術士会の発展の施策について述べております。すなわち、会の発展施策として会員数拡大、多くの施策継続、そして未定の3本目の施策です。安倍政権における3本の柱のうち金融政策、財政政策については私見でありますが評価され、成長政策に関しては評価以前の段階と思います。

長崎県技術士会の発展施策について評価しますと、会員数拡大の施策については会員数が一昨年末の会員数145名が昨年末は150名とやや増えたものの未加入の有資格者の数からしてまだ発展余地が残っていると思われます。優、良、可、不可で評価すると「可」と判断されます。多くの施策継続に関しては、6月の総会・研修会開催、12月の研修会・忘年会開催、7月の会員名簿の作成(350部)そして会員及び関係者への配布、1月・4月・7月・10月の機関紙APRENの発刊、長崎地盤研究会との勉強会「ジオラボ」(長崎県技術士会後援)の4月・6月・8月・10月・12月開催・11月の現場見学会の開催、

ながさき建設技術フェア2013(ナーク主催)の後援、長崎県測量設計業協会・技術交流フォーラム(佐賀)への講師派遣、長崎県技術士会役員会の偶数月の年6回の開催です。

特に役員会につきましては毎回10名以上の役員の参加による会議内容の充実が図られました。これらは昨年から長崎県技術士会の顧問(役員)に就任していただいた長崎大学名誉教授の岡林先生のご尽力が大きく、大変感謝しております。これらの諸施策は長崎県技術士会のホームページ及びメールによる開催予告や結果報告を行いました。多くの施策継続に関しましては評価しますと「良」と判断されます。長崎県技術士会は今年も多くの会員に継続研鑽(CPD)の機会・情報を提供することが会の存続・発展に繋がるものと信じて活動をさらに強化・活発化させたいと思っております。

安倍内閣の成長戦略が評価以前と申し上げましたが、長崎県技術士会の3本目の柱も昨年は具体化しませんでしたが、今年はそれなりに模索していきたいと思います。

その一つは長崎大学との連携強化です。昨年末には長崎大学工学部が主催する産業基盤維持管理技術研究会を立ち上げました。会長は長崎大学工学部の中村聖三教授で副会長は長崎県技術士会の川村副会長、顧問は岡林先生で長崎県技術士会との結びつきが強い研究会です。内容は今後大きな問題となる産業基盤の構造物等の維持管理に関する技術の勉強会・講習会・見学会を開催し、会員の維持管理に関する技術の向上を図り、かつ会員

の利益を図る目的に設立され、今年は具体的に活動することが確認されており、県技術士会としても大いに協力、参加したいと思っています。

次に長崎地盤研究会ですが、会長は長崎大学工学部の蒋宇静教授で副会長は山口（県技術士会会长）が務めており、これも長崎県技術士会と結びつきが強い研究会で長崎県技術士会が後援しています。今年は年5回開催している勉強会「ジオラボ」が100回目の記念開催が8月に予定されています。100回目のジオラボ記念開催は今から成功裏に終わらせるよう準備したいと思います。この為には長崎県技術士会の会員各位のご協力をお願いします。二つ目は公益社団法人日本技術士会との連携強化です。

今年は日本技術士会の長崎県支部設立が予定されています。県支部の運営や県技術士会との連携につきましてはさらに議論を進めていきたいと思います。更に今年は福岡で日本技術士会の全国大会が予定されており、他県との情報交換などが期待されます。これに関する情報は会員各位に発信・連絡しますので全国大会参加などのご協力をお願いします。

年の初めに当たり昨年同様に長崎県技術士会の発展の施策について述べました。数の確保すなわち会員数の拡大は昨年以上に努力が必要と思われます。そして多くの施策の継続はさらに内容を充実させるつもりです。3本目は長崎大学との連携の強化、日本技術士会との連携促進です。

今後、多くの会員、役員の方々のご意見を伺いながら会の発展施策の3本の柱の実施強化、そして4本目の柱を探していくたいと思いますので、会員各位の多くのご協力、ご支援をお願い申し上げますとともに、今年の皆様のご健康、ご健勝、

ご多幸を祈念しまして新年の御挨拶といたします。

長崎県技術士会と大学の連携

長崎大学名誉教授 岡林隆敏
(長崎県技術士会顧問)

山口会長から本会の顧問の御依頼をいただき、昨年（平成25年）6月から顧問として役員会に参加させて頂いています。平成24年3月に長崎大学大学院工学研究科を定年、専門分野は土木工学（工学博士）です。道路橋の維持管理と補修、近代化遺産（文化財）、情報データ処理（画像処理・データベース）の研究を行ってきました。大学での研究の経験を生かして、維持管理における業務と研究を進展させることができないかと考えています。

戦後長く続いた、生産中心の考え方から、使い続ける技術が必要になってきました。長崎大学工学部の中村聖三教授が立ち上げた、「産業基盤維持管理技術研究会」を一つの核とし、学術研究、技術士会、行政、異業種の交流が実現して、長崎県における新しい動きができればと願っております。技術士の資格はありませんが、長崎県技術士会と大学との連携のお役に立てば、と思っております。

技術士会と長崎大学との連携課題として、次の3点があると思います。

（1）技術士会会員の業務（研究）と大学の研究との連携

実務的な課題と学術的な研究の連携が十分にされていない現状があります。技術士会の会員から、大学は敷居が高いと言われます。御依頼があ

れば、会員の抱えている問題を解決するノウハウを持つ研究者が大学にいないか、私のできる範囲で、関連した研究をしている教員をご紹介させていただきたいと思います。独立法人化以来、大学にとっても従来の学術的研究から、研究を実現化して市場に流通させ、研究資金を得ることが重要な課題になっています。御要望がありましたら、技術士会の事務局（山口会長）までご連絡ください。

（2）技術士会のCPD（継続職能開発）の支援
欧米の技術者の永続的な技術（能力）を目的とした、CPD（継続職能開発）のプログラムが、日本でも導入されました。大学内では各種研究会や講演会など、CPDの対象となる催しが行われています。これらの催しと技術士会を連携させることで、CPDの対象を増加させることができます。大学にとっても、学術研究の実用化の可能性が開かれます。さらに、技術士会の要望する講演会の講師を探すことができます。

（3）大学におけるJABEE（ジャビー）の取り組みとの相互連携

長崎大学工学部と水産学部では、技術士一次試験が免除となるJABEE認定プログラムが導入されています。大学生に、技術士資格の意義や実務における経験を指導する必要があります。技術士会から講師を出して頂いて、学生に講演する支援が必要です。技術士会にとっても、新会員を育てる上からも、重要な活動に位置づけられます。

40年間大学の中で生活してきた私は、技術士会の役員会に刺激されて、脳が活性化することが多々あります。山口会長の効率的な会議の運営、役員の方々の自信に裏打ちされた個性ある発言など、新鮮な経験ができる、技術士会の役員会を

楽しみにしています。「懇親会」での、皆様の長い人生からの奥深い発言も定年2年目の私にとっては、大変新鮮です。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

安全・安心な社会を目指して -継続は力なり-

曾我 忠治（建設）

私が関東から長崎へ帰ってきたのは、雲仙普賢岳が198年ぶりに噴火した平成2年のことでした。あのころはいい観光スポットになると思っていましたが、翌年以降想像もしていなかった火碎流や土石流等により大災害が発生し、多くの方々の生命・財産及び日々の生活に甚大な被害を与えました。このとき自然の力の大きさを私は改めて思い知らされました。あれから20数年がたち今日見事に復旧しています。私も国道復旧の業務に携わった技術者として、非常に感慨深いものがありました。しかし山麓には火山災害により土砂や岩石などの堆積物がまだ1億7千万m³も存在し、危険がなくなったわけではありません。まだまだ災害のリスクが残っている状況となっています。

このように長崎は過去において火山災害をはじめいろいろな自然災害による被害が数多く発生しています。ところが、最近は不思議と大きな台風被害等は発生しておりません。紙一重のところで台風の進路がそれているようです。これをただ単に運がよかつたという一言ですませていいのでしょうか。諫早集中豪雨・長崎大水害や台風19号災害から何十年も経過し、長崎の人々は災害の記憶を忘れかけているように思えます。『今度もたぶんだいじょうぶだろう』と何も備えをしない人が増えているようです。

『天災は忘れたころにやってくる』という寺田寅彦の言葉があるように、油断をしていると大きな被害にあってしまいます。落とし穴は、人々の意識の中にあると思います。

まずは過去の災害教訓の伝承等により住民の防災意識を向上させることが大きな課題と考えます。現在災害からの節目の年に色々なイベントが行われ意識の高揚が行われていますがこれも一過性に終わっているように思えます。住民に忘れさせないようするためにには繰り返し継続的にわかりやすく伝え聞かせる知恵と努力が必要だと思います。なにかもう一工夫ならないのではないかと思う。災害を知らない世代も多くなってきています。学校や各自治体における災害教育は非常に重要です。若い世代の意識高揚ができれば、地域全体に必ず広まるはずです。若い人が興味を持つ I C T (情報通信技術) 等をもっと積極的に活用 (C G 等) し、わかりやすさやスピードを改善して意識を高めていく必要があると思います。いずれにしても早めの避難を心掛け『自分の身は自分で守る』という能動的な考え方をもっておかなければなりません。

また、昨年末(H24.12)の笛子トンネル事故発生は、私自身たいへん大きな衝撃を受けました。私たちが関わっている土木施設はこんなにも危険な状態となっているのかと。この事故が象徴するように日本のインフラは安全・安心の信頼を失いつつあります。経常劣化はもちろんですが設計・施工や点検等維持管理に問題があったようです。その他橋梁等も老朽化が進み、機能の健全度が低下し、安全性が確保できていない橋梁も多数発生している状況となっています。

このようなことにより、インフラ施設の信頼回復は重要な課題となっています。あたり前にすべきこ

とをしてこなかったツケがここにきて回ってきています。厳しい財政を考慮すれば予防保全的な視点から点検等をいかに精度よく効率的に行い、いかに点検結果を有効活用し設計に反映させ、早めの補修をおこない構造物を長寿命化させることができるかがカギとなっています。

点検やモニタリング等を確実に実施し、このデータを蓄積し今後有効的に活用していく必要があります。一過性に終わらせることなく継続して事業を推進し、品質を確保し安全性を高めていかなくてはいけません。財政事情もありますが、ここでも I C T 等を有効活用し効率化を図り途絶えることなく継続して実行していくことが重要と考えます。たとえば構造物の3次元化等をよりいっそう推進し、調査や補修履歴等を反映させ、維持管理の効率化や精度向上に役立てることも必要です。この資料は、地元住民にもわかりやすく説明し安心してもらえる材料として有効活用ができるものと考えます。

私は安全・安心な国土づくりに貢献できるよう今後とも日々研鑽を継続していきたいと思っております。どうぞよろしくお願ひいたします。

松尾稔著『現代の桀王・紂王』

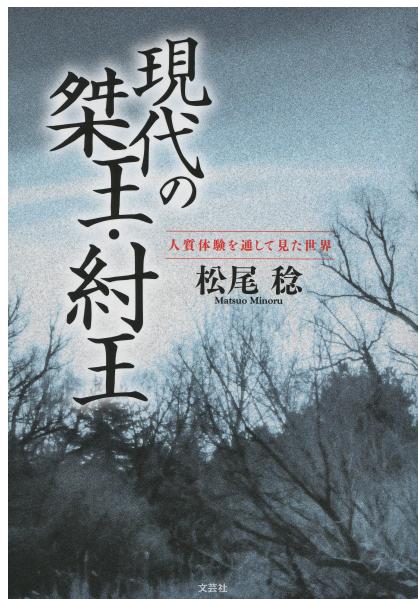
(-人質体験を通して見た世界-) のご紹介

長崎大学名誉教授 岡林隆敏
(長崎県技術士会顧問)

今年1月、長崎県技術士会の理事を務めておられる松尾稔さんが、『現代の桀王・紂王』(人質体験を通して見た世界) を文芸社から出版されました。松尾さんは、三菱重工業(株)で火

力プラントの設計に従事し 1994 年（平成 6 年）に退職、現在、松尾技術士事務所を設立し技術コンサルタントとして活躍されています。

著書の『現代の桀王・紂王』（-人質体験を通して見た世界-）は、「酒池肉林」で知られた中国の暴君「桀王・紂王」の話ではありません。副題にあるように、松尾さんが三菱重工業の火力プラント設営時に、イランやクウェートなど中東のイスラム教国での体験、特に「人間の盾」として人質



になったことが書かれています。

松尾さんはお父様の仕事の関係で、北朝鮮（新義州）で誕生されました。著書の最初の部分では、朝鮮での生活、本土への引き揚げなど、終戦の混乱期の子供の頃が回想されています。本題に入り、1985 年頃から始まったイラン・イラク戦争の最中、爆弾が落ちる中で、火力プラントの交渉をしている息詰まる生活が紹介されます。次に、イラクがクウェートに侵攻した 1990 年 8 月、松尾さん達三菱の社員は、イラクで外国人として人質にされます。バカラ近くの石油精製工場の技術者の宿舎に、「人間の盾」として拘束され、その後解放されるまでの 130 日間の激動の日々が描かれています。

す。

本を読み終え、私は改めて自分の身近な人の中に、このような過酷な時間をくぐり抜け、仕事を続けていた人達がいることに感動しました。身近な技術士会会員の経験だけに、通常のノンフィクションを読むよりはるかに現実的であり、松尾さんが絶望の中に光を見ていた体験が強く伝わってきました。本を読みながら頭に浮かんだことは、日本人 10 人が犠牲にたった 2013 年 1 月 16 日の「日揮」アルジェリア人質事件でした。

テレビのニュースで見るのではなく、技術士会の会員の体験だけに、自分が拘束された場合の疑似体験ができるほど、現実感がありました。日本人が仕事で海外に行く機会が増えてきました、何が起こるか分からぬ時代、自分や会社の危機管理の視点から、是非会員の皆様にも読んで頂きたい本として推薦します。

平成 26 年 新年を迎えて

長崎地区代表幹事 每熊 元

新年明けましておめでとうございます。

旧年中は、県技術士会、日本技術士会の活動にご協力頂き有難うございました。

日本技術士会関係では、長崎地区を長崎県支部へ移行することが大きな課題がありました。

日本技術士会が公益社団法人の認定を受けて、九州支部が九州本部と名称を改めることにより、九州各県に支部を設置出来ることとなりました。

九州本部の指導もあり、長崎地区から支部への移行に対し、アンケートを実施しましたところ、

6割以上の皆様から同意を得ましたので、発議書への署名捺印をお願いしました結果、約同数の同意書を頂きました事を踏まえ、引き続き支部設置への準備を進めております。

色々とお手数をかけましたがご協力を頂き本当に有難うございました。感謝申し上げます。

現在の状況としましては、九州本部を通じ、統括本部（東京）に支部設置の申請を行っております。

今後の予定では1月9日に統括本部からの設置承認となっています。

その後、速やかに支部役員（幹事）選挙と続きます。また、規約（手引き）の作成等、年次大会の開催までには6月頃まで時間が掛かると思っています。

会員の皆様方には今後色々とお手数をかけます

が、よろしくお願ひ致します。

設立後の活動につきましては、今までどおり「長崎県技術士会」と一体となった活動を行う事が重要と考えております。従いまして、今までの九州本部との連絡調整に加え、設立後支給されます統括本部からの交付金を活用し、県技術士会と一体となり技術士としての責務である継続研鑽の機会を増やすことが出来ればと考えています。

私自身も就任後半年で不慣れなところが多く、未熟ですが、皆様のご協力、ご指導を得ながら努めて参りたいと思っていますので宜しくお願ひ致します。

今後益々技術士会の交流が進み、技術士会が益々発展することを願いますと共に、会員皆様のご活躍を祈念しまして、支部設置への中間報告を兼ね、新年のご挨拶と致します。

※ 機関紙発行担当者より

2013年は、1300年以上も続く伊勢神宮と出雲大社がそろって遷宮を迎えました。伊勢神宮の遷宮は、20年毎に全く新しく東の米座から西の金座へ遷宮を繰り返し、何もかも新しくなって2014年の新年を迎えました。一方、出雲大社の遷宮は、だいたい60年に一度とういう流動的に社が傷んだところを修復して、元の場所に神様がご鎮座されたその時を再現する「原点回帰」の意味合いのようです。

それにリニューアルする方法があることを学び、私達も、心身新しくなって新年を迎え、長崎県技術士会が更に活力あるように努めたいと思います。会員の皆様のご協力とご意見をお願いしながら、本年もどうぞよろしくお願ひ致します。

園田 直志
N.ソノダ技術士事務所
〒852-8021 長崎市城山町2-4
TEL 080-3226-7200 FAX 095-861-8279
Email: sonoda_naoshi@icloud.com

松本 守
(有) 創拓エンジニアリング
〒852-8041 長崎市清水町2番4号 FGEX 長崎ビル3F
TEL 095-849-1781 FAX 095-849-1749
Email: so_matu@d2.dion.ne.jp